図版つき
完全版

空白の古代史
日本とユダヤの関係図

田中英道
HIDEMICHI TANAKA

DIRECT

イントロダクション

〈世界的存在としての「日本」史〉

皆さん、こんにちは。今日は3回目になります。

これまでの歴史でお分かりになったと思うのですけれども、日本という存在は、決して皆さんが日本史ということで学んだようなことではないのです。

世界の中の日本ということで、これまで視野を広げてみるということがあまりなかったために、歴史が面白くなくて、歴史は単なる年代を覚える、あるいはいろいろな穴埋め問題みたいなところがありました。

そこにある種の精神史的なもの、あるいは文化的なものというか、そこに人類のつながりといったものが欠けていたのです。日本のことは、せいぜい朝鮮や中国との関係で見ておけばいいのだということでした。

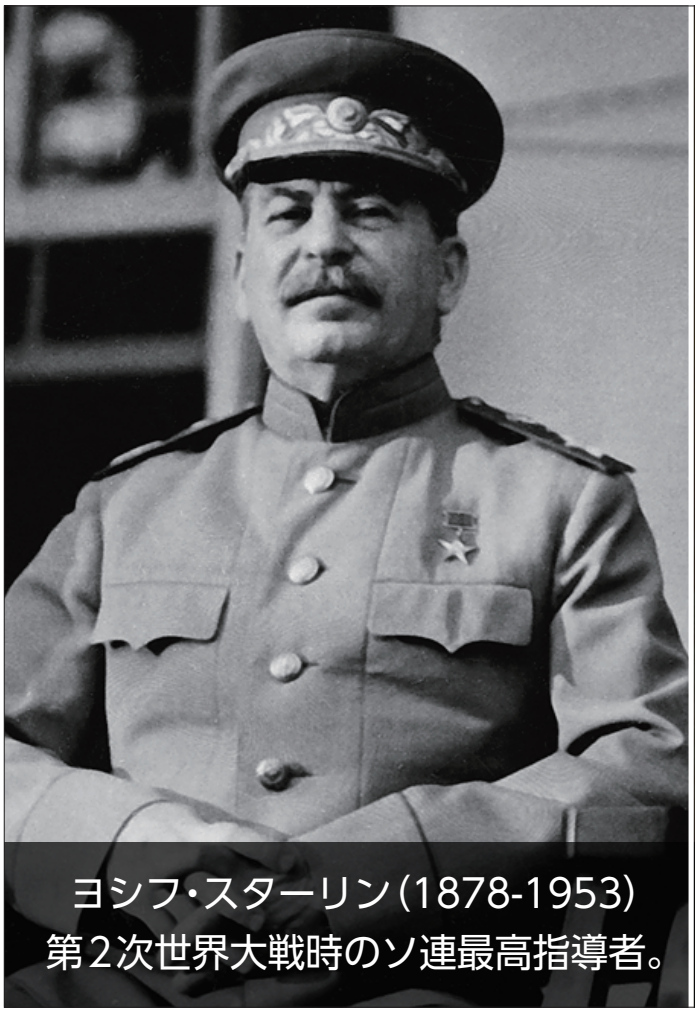
これは実を言うと戦後の歴史からも分かります。私は、アメリカと日本の戦争というのは引き分けと見ているのです。

これはどういうことかというと、天皇が少しも東京裁判に引き出されなかったことでよく分かるように、大東亜戦争を始める時の詔（みことのり）から最後の終わる、終戦の詔（みことのり）まで、これはもう全部天皇が読まれたわけです。

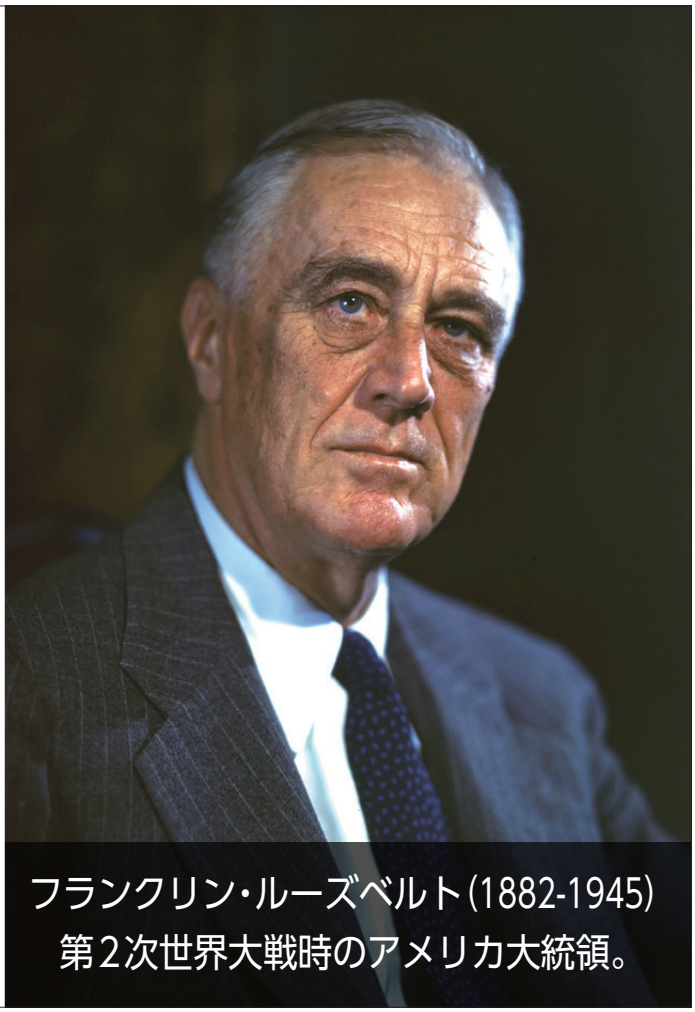
基本的に言えば、あの戦争の責任者が天皇になるのです。ところがそれを避けています。両者がそのことを隠しているというか、そのことに触れないでいるということそのものが、大東亜戦争が引き分けということなのです。

これは、アメリカもぜひやってほしい戦争だったのです。明らかに経済的な問題もそうですし、要するに、戦争をしないと物事が動かないと思っている人たちが多かったのです。

結局失業者が多いことで、その失業者を軍隊、兵隊で吸収するということもあるのですけれども、それと同時に、ちょうどその時が非常に社会主義の時代だったのです。



ヨシフ・スターリン（1878-1953）
第2次世界大戦時のソ連最高指導者。



フランクリン・ルーズベルト（1882-1945）
第2次世界大戦時のアメリカ大統領。

ご存知のように、その後ソ連が崩壊してしまうというようなことはまだまだ予想がつかなくて、何とかソ連が理想的な国であるということを言い続けようとして、それにアメリカのルーズベルトも同調しました。

スターリンとルーズベルトが一緒になってとにかく世界を共産化する、左翼化しようとする、そういう動きがあったのです。

こういう動きは今、特にトランプになってそういうことが完全に消えましたけれども、オバマなんていうのは、ほとんどハーバード大学では左翼だったのです。

今、民主党側はそういう革命家が多いわけです。みんな、何か左翼、要するに社会主義とかと言うと、それがあまり触れたくないような風潮を日本でもつくっていますけれども、それが前面に出ていたのです。それが20世紀だったわけです。

大体、ソ連がそういう社会主義国であったわけです。左翼というと必ず社会主義を支持して、そして大きな政党、共産党も社会党もたくさんありました。ところが今はどんどん退潮してしまって、一体そういうことがあったかどうかという感じになっています。

そして今、中国の共産党政権が非常に苦境に立っているというか、**一帯一路**がほとんど失敗して、中国共産党を支持する国がいなくなってしまったという事態が出てきてしまっています。崩壊はもう時間の問題だろうということになっているのです。

【一帯一路】2014年11月に中国で開催されたアジア太平洋経済協力首脳会議において、習近平総書記が提唱した経済圏構想。アメリカに取って代わり世界の経済覇権を奪おうとする計画。

いずれにしても、そういうことがイデオロギーとして、非常に問題になっていた時代があるわけです。同時に、やはりそこで耐え抜いてきた国があるのです。それが日本だったのです。今日本が戦後のめちゃくちゃな道徳教育を否定しています。

アメリカにしてもヨーロッパにしても、全部伝統的な教育、伝統的な意識を忘れさせるような否定

バラク・オバマ（民主党）
前アメリカ大統領（2009-2017）

ドナルド・トランプ（共和党）
アメリカ大統領（2017-）

的な教育がありました。これは私が1968年に、フランスに留学していてよく分かったのです。

フランス革命ではなくて**五月革命**というのがありました。それでもって、そういうモラルを変えてしまおう、文化を変えてしまおうということがあって、人々はみんな何か人間がだらしなくなってしまったのです。学校までだらしなくなってしまいました。

【五月革命（フランス）】 1968年5月、フランスのパリで起きた学生を主体とする左翼革命運動。伝統的価値観を否定するもので、チェ・ゲバラや毛沢東をイコンとして掲げ、学生たちは「平等、自由、セクシャリティ」を訴えた。

そういうことがある種の抵抗でした。皆さんもご存知のように**ヒッピー**だとか、ビートルズはそこまでいかないにしても、おそらく依然としてそういう秩序を破壊しようとすることがいいことだという時代があったのです。それが一方でずっと続いているのです。

ヒッピー
1960年代後半のアメリカに起こったカウンターカルチャー運動。伝統的・保守的な社会や制度を否定した。写真はヒッピースタイルのミュージシャン（wikimedia）。

団塊の世代なんていうのは、まだまだそういう「否定しよう」「破壊しよう」という雰囲気があります。そして今、まさに50代、60代が多いマスコミ、メディアがそういう動きをしているわけです。

ですから、そういうことを考えると、やはり「この日本という存在が世界的な存在である」ということを常に考えないといけません。そういうことは決して今だけではなく、古い時代でも同じだったのです。

それはどういうことかというと、今は飛行機や船、特に飛行機ではすぐに、1日でアメリカでもヨーロッパでも行けます。そういう交通というものが非常に頻繁に行われてきたわけです。

今はちょうどコロナ、武漢ウイルスがそれを止めてしまったというところに、少し面白い状況が出てきているわけですね。外との断絶というのが出てきたわけです。

この時に、「やはり自分たちの国家の歴史というのをもう1度きちんと考え直そうではないか」という雰囲気が今出てきていると思うのです。

ですから、今海外に行けないとすると日本の中で動く以外ないからということもあるのですけれども、日本の中にかなり古いものをわれわれがもう1度よく見て、そこに新しい日本の良さを発見するということが可能になってきています。

結構じっくり散歩すると、いろいろなものが残っているというのが分かってくるわけです。東京でもそうです。古墳もあるし、神社もあります。もちろんお寺もあります。それから公園、つまり昔の庭園がたくさんあります。

これも各地同じことだと思うのです。そういうのを見直すことによって、歴史とのつながり、自分たちの国の歴史とのつながりを、確認できる時代に今なってきたというふうに思っているわけです。

私は西洋に10年近くいるというか、5年ぐらい留学した後、もう毎年のように行っていたのです。けれども、去年の11月に行ったきりで、西洋に6ヶ月行かなかったという時期は今年が初めてではないかなと思うぐらい行っていたわけです。

ですから、かえってそういう時期にさらに日本のことを調べる、日本のことが分かるということになってきたような気がするのです。これはもう、皆さんも同じような体験をなさっている方もいると思うのです。

日高見国と大和国

この前まで、一応、日本の縄文という時代、日本に**日高見国（ひだかみこく）**というもう1つの国があったのではないかということをやりました。

【日高見国】古代において東の大和や蝦夷を指す言葉。田中英道教授は、日高見国は関東にあり、日高見国こそ高天原であるとの見解を示している。

これは祝詞のおはらいの有名な言葉の中に、「日本に**大倭日高見国(おおやまとひだかみこく)**があった」ということを書いてあります。

【大倭日高見国】大祓詞（おおはらえのことば）という中臣氏の祝詞には「大倭日高見国」という言葉が使われている。

今までは日高見国（ひだかみこく）がどういう意味だか分からなかったのですけれども、それが日本だということで、これが完全に東国のことだったのだということが分かってきました。

それから大嘗祭（だいじょうさい）ですが、ちょうど去年新しい天皇陛下がご即位された時に大嘗祭（だいじょうさい）がありました。その大嘗祭（だいじょうさい）が行われる、**悠紀田（ゆきでん）と主基田（すきでん）**という2つの神殿があって、同じことを2度繰り返されているということで非常に注目されたわけです。

【主基田（すきでん）、悠紀田（ゆきでん）】大嘗祭の時に主基の神饌とされる穀物を作る田を主基田、同じく悠紀の神饌とされる穀物を作る田が悠紀田。

なぜ2つの神殿があって同じことを繰り返されるのかということについて、つまり「儀式が繰り返されるというのは何か」ということは、今はほとんど**折口信夫**も誰も語っていなかったのですが、大倭日高見国（おおやまとひだかみこく）があったということがヒントになるのです。

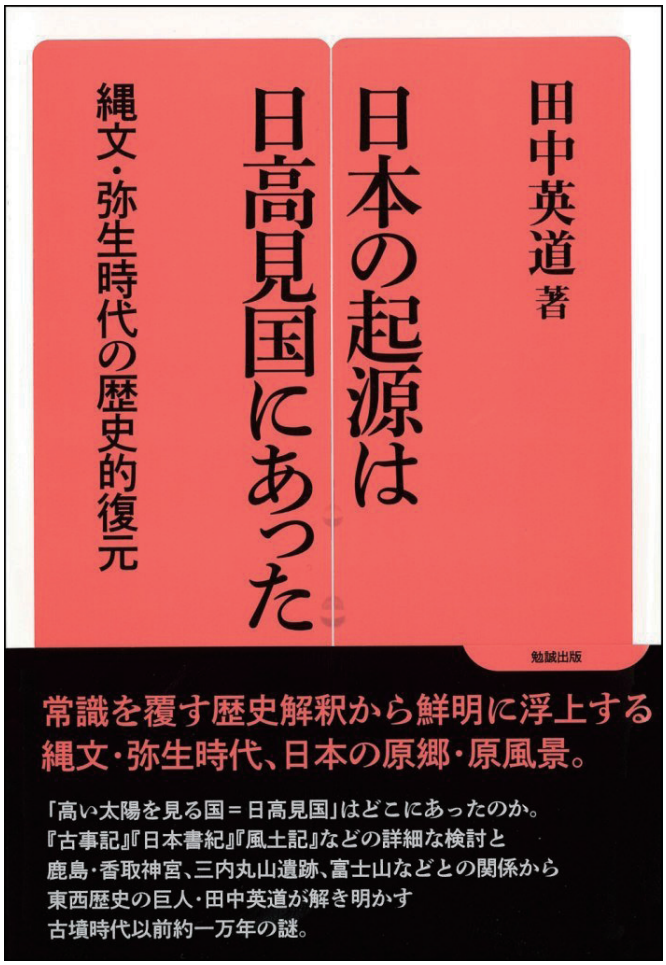
【折口信夫（おりくち・しのぶ、1887−1953）】民族学者。柳田国男の高弟であり、民俗学の基礎を築いた。

日高見国（ひだかみこく）と大和国という2つの国、日高見国（ひだかみこく）が最初に儀式が行われる悠紀田（ゆきでん）、それから主基田（すきでん）が大和国です。2つとも同じ伊勢神宮には向いていますけれども、この2つの神殿で同じ即位の儀式をされるということが解明できるわけです。

「日本には2つの地域があった。それが日高見国（ひだかみこく）であり、大和国である」、そして結局、日高見国（ひだかみこく）の時代に縄文時代が重なり合うのだということが分かってきたのです。

これがいろいろな資料で分かってきたということは、これまで私もいろいろと論文を書いてきたので、ご興味のある方は読んでいただけるとありがたいです。

以前、**日高見国（ひだかみこく）のことを書いた本**を紹介しましたけれども、そういう縄文の時代が、縄文土器という素晴らしい土器文化を読んで



『日本の起源は日高見国にあった』（勉誠選書 刊、田中英道 著）

いるわけです。

〈太陽信仰～太陽を求めた縄文人〉

これは、例えばエジプトなんかと対比すると非常に面白いわけです。この前もエジプトの文化で**太陽神ラーとか、さまざまな神々がいる**ということを少しご紹介しました。

面白いのは日本がやはり太陽神、つまり日高見国（ひだかみこく）とは何かというと、日が高く昇るのを見る国ですね。そうしますと、太陽信仰なのです。これがいずれは天照（あまてらす）になるわけです。

そして、人々がどうして動いたかというと、「太陽が昇る方向に人々が歩いてきたのだ」ということなのです。これは少し面白いのです。エジプトのちょっとした絵葉書がここにあるのですけれども、船があって、その一番先頭に乗っているのが太陽神なのです。

これはちょうどアゼルバイジャン、黒海沿岸の地図です。**ゴブスタン**は第1回目の時でしたでしょうか。船があって、そこの先頭に太陽が昇っているという岩絵を皆さんにご紹介しました。だから、これは明らかに太陽に向かって船が動いているのだということを、刻んだ彫刻というか掘りがあったということです。

こういうジャンルの岩窟壁画、岩窟の文字というのはいろいろとたくさんあるわけですけれども、この岩窟壁画でそれを示していたのです。これとそっくりなのです。やはり、この一番前にラーがいます。これは太陽が導いていく船に、人々の神々が乗っているということです。

ですから、当然それが日本にやって来るということですね。一番太陽が昇る所は日本ですから、当然そういうことになるわけです。ですから、それが日本人の源流であるということです。太陽の昇る所に行こうとしたら、日本がその太陽が昇る所であったのです。

ところが、太平洋側に着いた人々は、まだ太陽が昇る所はここではないと、さらにもっと海の向こうだということで、それ以後は、今度はベーリング海峡を渡ったり、南太平洋を渡ったりして南米に行くわけですね。

ですから、南米、北米、特に面白いのは南米で、マチュ・ピチュをご存知だと思うのですけれども、全部太陽信仰なのです。ああいう所まで行ってもまだ太陽信仰です。ですから、これは日本人、日本の縄文人たちが行っているのだなというのがよく分かるのです。

そのことは**エクアドル**とか、それからオーストラ

『太陽の昇る国を目指して』～世界の様々な太陽神信仰

「太陽の昇る国をめざして」～コブスタン遺跡岩窟壁画

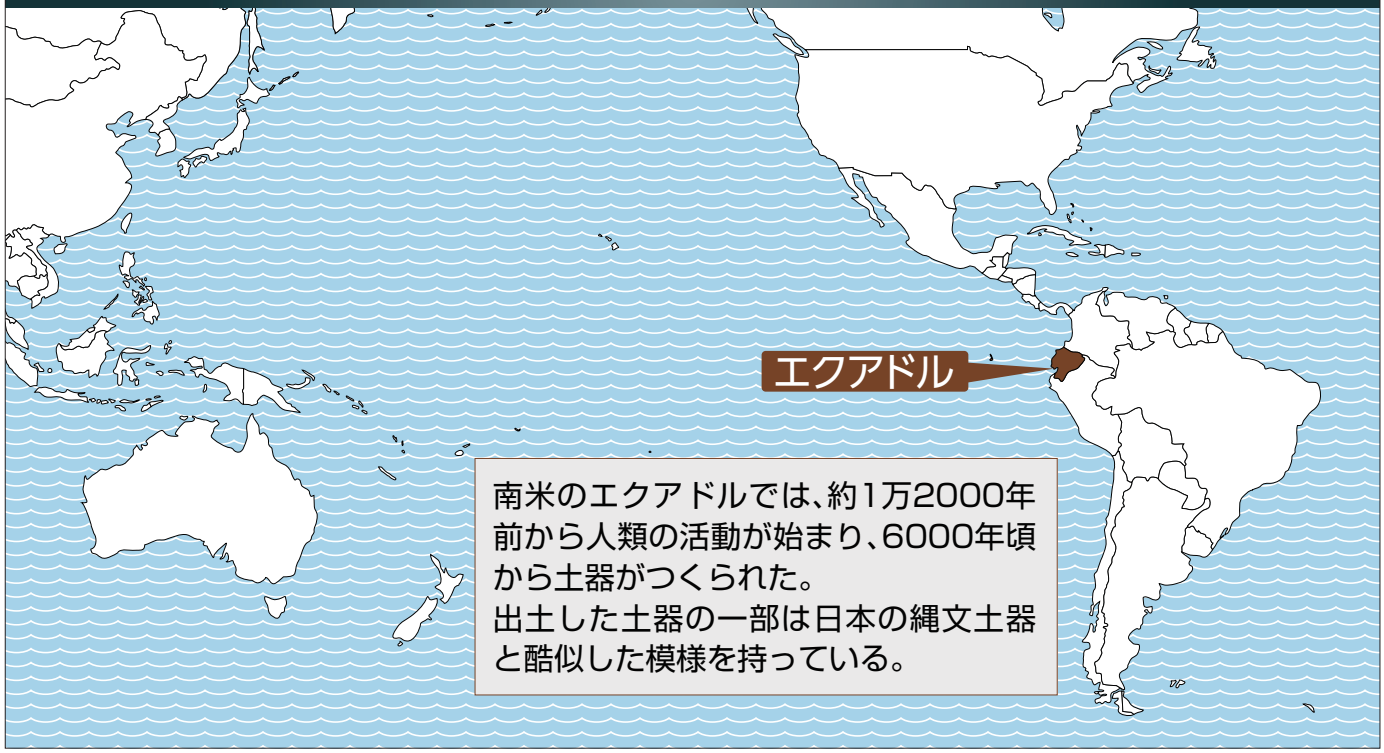
コブスタン遺跡（アゼルバイジャン）の岩窟に残る線刻画の中に大きな船の絵があり、その舳先には太陽が描かれている。これは船が死者を永遠に運ぶと考えられていたこと関連するかもしれないが、それに加えて、そこには太陽信仰が窺える。
（『火焔土器は水紋土器である』「はじめに」より）

リアの北東にある島もやはり日本の縄文のいろいろな工具とか武器とか、あるいは縄文の模様の土器などが発見されているのです。ですから、「大体、環太平洋も縄文人たちが行っているのだな」ということが分かってくるわけです。

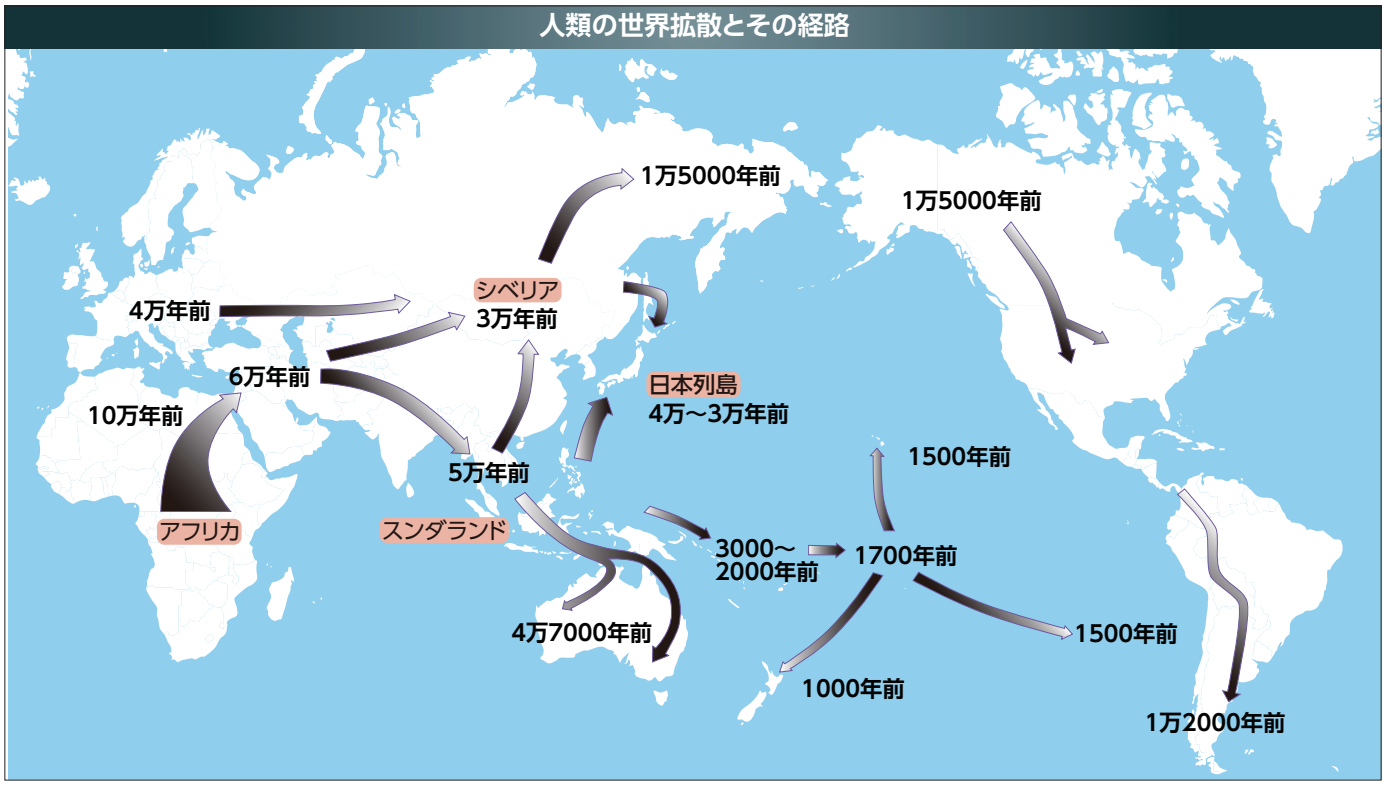
それからもちろん朝鮮半島にも縄文人が行っています。それからDNAなんかを見ても、縄文人が中国大陸にも行っているということが分かるのです。

この前も中国、朝鮮にとどまるよりも、まず日本に行くという人々が多かったということを述べましたけれども、まさにそういう縄文人が世界中、世界中というよりは環太平洋、太平洋の周りとかアジアに行っているということが分かるのです。

エクアドル



南米のエクアドルでは、約1万2000年前から人類の活動が始まり、6000年頃から土器がつくられた。
出土した土器の一部は日本の縄文土器と酷似した模様を持っている。



それから、朝鮮にも日本の縄文人が行っているわけです。もちろん琉球もそうです。ですから、琉球なんていうのは、今中国人が何か「あそこまで中国領だ」などと言っていますが、とんでもないです。

あそこはほとんど縄文人が行っているのです。中国人が来たなんていうことは、歴史的に一切記録がないのです。尖閣なんかもそうだろうと思うのです。ですから、結局、ああいう所は縄文土器の文化があると言ってもいいと思うのです。

ユダヤ人と日本人

〈ユダヤ教の誕生〉

「ユダヤ人たちがやって来た」という話をしようと思うのです。これはエジプトが実を言うと太陽神だということをお話ししましたけれど、ここ（※絵を指して）にも太陽神が先頭にいますけれども、この太陽神ではなくなる時があるのです。

このところで、少し面白いのです。つまり、太陽神であればエジプトは日本と同じなのです。しかし、太陽神であると同時に、このテーベの神のアメンと一緒になったアメン・ラーというのがエジプトの神となったのです。

このラーという限りは太陽神なのですけれども、これが新王国時代の第18王朝の時に、王子の**アメンホテプ4世がアテンという神**、これも一応、太陽神とはなっているのですけれども、これが唯一神だという一神教を主張し始めたのです。これがアテンというのです。

このアテンとなった時に、これまでのように自然神である太陽神ラーというよりも、アメンという神はテーベの神ですから、ラーと同化していたのがアテンという1つの唯一神となってしまった時に、この唯一神というのがやはりユダヤ人たち……。ご存知と思うのですけれど、モーセが最初にいたのがエジプトなのです。

エジプトの記録にはモーセのことは載っていないのですけれども、モーセのエクソダスというか大脱出というのは、この奴隷としてエジプトにいたユダヤ人たちがパレスチナに帰るという脱出劇なのです。

ですから、エジプトが唯一神を持ったわけですけれども、1つはやはりそういう唯一神ということで、これがユダヤ人たちがエジプトからもたらした、ユダヤ人たちの特有な唯一神になっていって、ユダヤ教というものが成立し始めるわけなのです。

これが、モーセもそうですけれども十戒というものを創り出して、ユダヤ人たちというのを団結し

初めての一神教

最初の一神教は、紀元前1350年(今から3370年)ほど前に、エジプトで登場した。ファラオのアメンホテプ4世(後の名を改めアクエンアテン)は、数多くあるエジプトの神々の中から、太陽神アテンを「至高の神的存在」と宣言してアテン崇拝を国教とし、他の神々の崇拝をすべて禁止した。この宗教改革は、アクエンアテンが死ぬと衰退し、エジプトは再び多神教にもどった。

◀アテンを崇拝するアメンホテプ4世

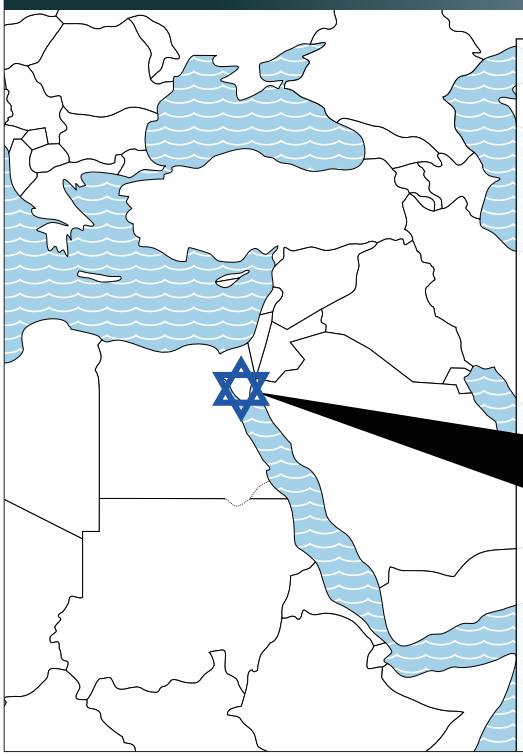
始めたのです。

ご存知と思いますけれど、ちょうどシナイ半島から、中東、アフリカから出発した人々は、ユーラシア大陸に行くためにはちょうどそこを通らなくてはいけないわけですから、イスラエルというのはある意味で回廊なのです。

あそこにシリア、イラン、今で言うとイラクですね、レバノンといった中東諸国があるわけですけれど、そこを通って来ないとアフリカから出発した人たちはユーラシアに行けない、日本にも行けないですね。あるいはヨーロッパにも行けません。

しかし、ヨーロッパは船でも行けますから、ですから、当然そこが争いの国々になるに決まっているのです。そこの中に、もちろんイスラエルがい

ユダヤ教の成立



アメンホテプ4世による初めての一神教崇拝はその統治の終了とともに終わったが、約80年後の紀元前1280年頃、モーセがヘブル人をエジプトから脱出させ(出エジプト)、シナイ山で神ヤハウェと契約を結び、ユダヤ教が成立した。(モーセの十戒)。ユダヤ教では、唯一神ヤハウェのみが唯一の正当な王者であり、人はヤハウェだけを崇拝しなくてはならない。

シナイ山(標高2,285m)とモーセの十戒(レンブラント作)

たわけなのです。

〈ユダヤ人の離散～ディアスポラ〉

このユダヤ人たちというのは、最初から非常に優秀な民族だとも言えるわけで、この1つのアッシリアにやられたり、あるいはバビロン帝国にやられたりしながら12支族が離散していくのが大体、**紀元前5世紀までの歴史**だったわけです。

それでまた戻ってきたりはするのですけれども、今度は**ローマ帝国に占領されて、またそれに抵抗して四散する、これは紀元70年**です。

常にローマ帝国と戦いをしながら、敗れて、それがやはり離散していくわけです。これがディアスポラというわけです。この国の人々の強さというのは、やはり言葉の強さです。

言葉というものを非常に強く自分の民族たちは記憶し、そしてそれを常に自分たちの精神の糧にしていくわけです。

もちろん宗教そのものが唯一神であるし、こういう民族というのは、後になるとスファルディとアシュケナージという新しいユダヤ人が出てきます。スファルディというのはスペインという意味なのです。アシュケナージというのは、ロシアの方で生まれた7～8世紀ごろから出来上がっていく新しいユダヤ人です。

この2つのユダヤ人たち、最初にスファルディたちが、やはり1つのユダヤ人たちの生きる形態をつくります。土地を追われていますから、逃げていくと、当然それがどこの国に行っても侵略者あるいは侵入者として捉えられて、土地は持てないでそこに寄留していく、そこに寄生していくというか、そういう人々として考えられているわけです。

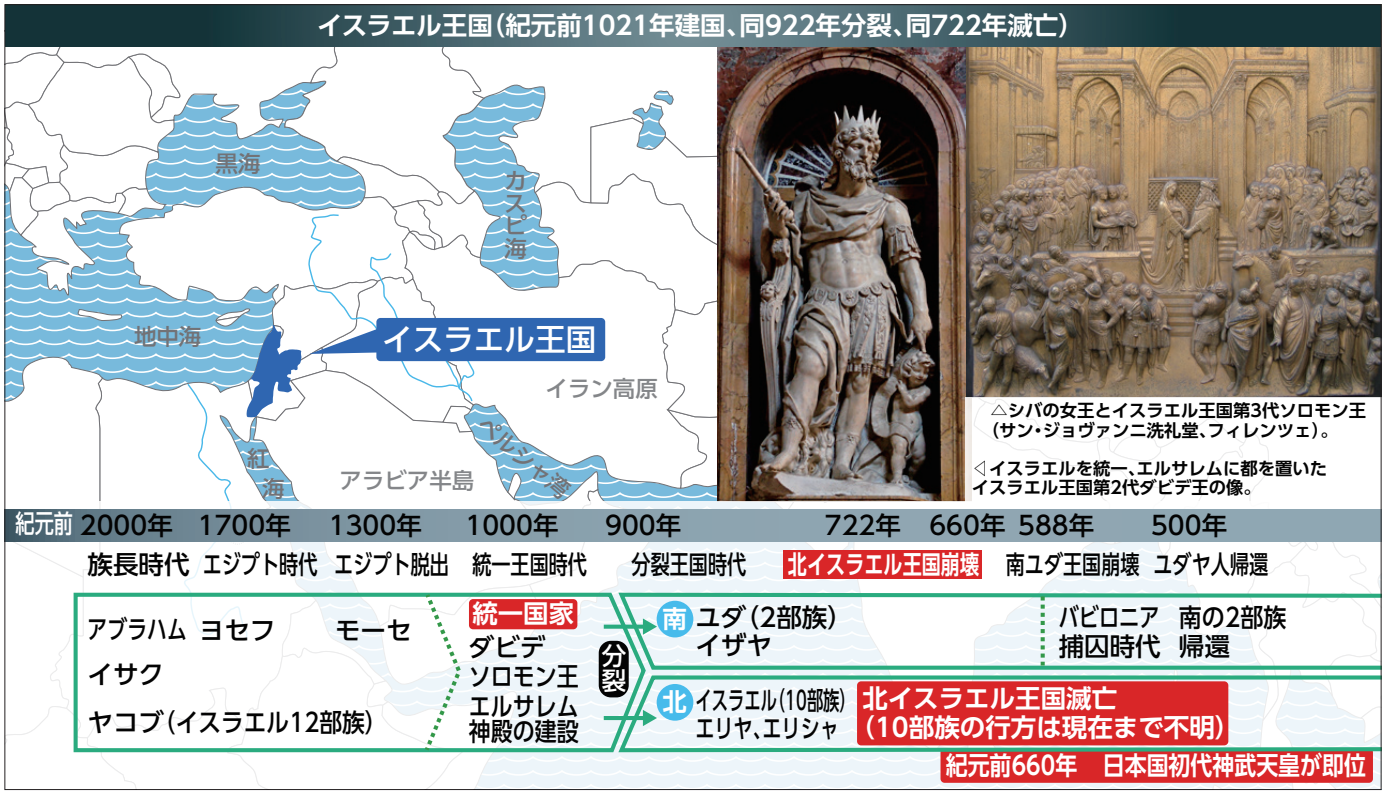
それが、例えばイスラム教は非常に寛容で、彼らは自分たちの土地にいても構わないということでいますけれども、いずれにしても、やはり常に異国人としているわけです。

このユダヤ人たちというのは、私に言わせれば非常に重要な世界の歴史のファクターというとあれですけれども、このユダヤ人のおかげで世界が結ばれたと言ってもいいでしょう。

これはなぜかというと、まず国際的商人であるということです。ですから「こっちのものをこっちに移す」という、そしてそこで商売をするということに長けていました。

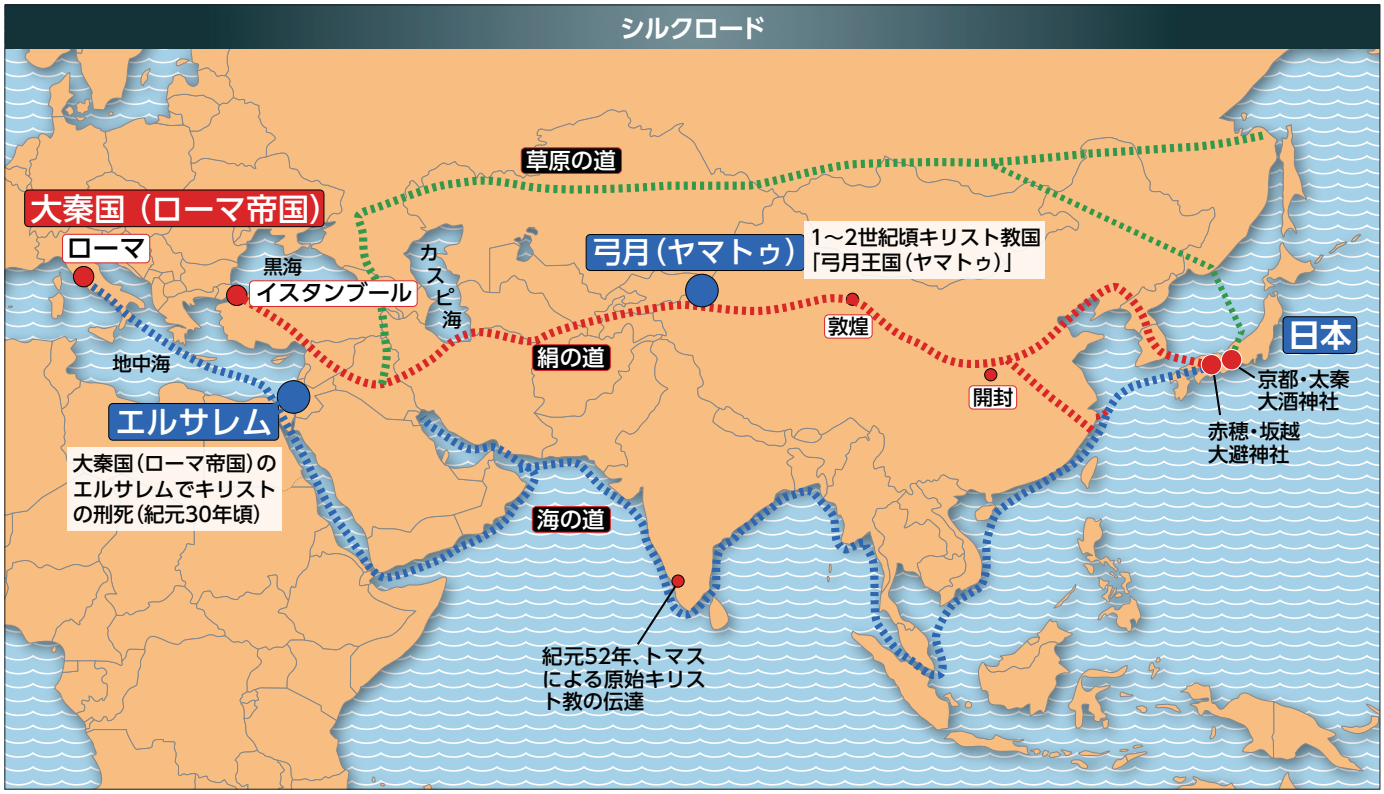
〈太陽を求めて日本へ〉

普通シルクロードといいまして、これはもうご存知と思うのですけれども、古代ローマから始まっ



て中国のカンバリク、今の北京までつなぐこのルートを、いくつかあるのですけれども**シルクロード**、イタリア語ではVia della seta（ヴィーア・デッラ・セータ）というのですけれども、こういうものが古代ローマからずっとあったということが分かります。ですからこの道を通ってユダヤ人たちがやって来る、あるいはさまざまな国の人たちがやって来ます。

今までは古代ローマと中国とを結んでいるから、古代ローマの人と中国人が何か行ったり来たりしているのではないかということで、過剰に評価しているのです。「中国人が非常に国際的だったんじゃないか」ということになってしまっているのです。ところがとんでもないのです。そういうことはほと



シナゴーグ
ユダヤ教の集会所（教会）。ユダヤ教における宗教生活の中心。※写真はニューヨークのシナゴーグ（wikimedia）

んどないのです。

誰がやったかというと、基本的にはユダヤ人なのです。これはなぜかというと、ユダヤ人というのは帰る国がないのです。ないとなると、やはり常にどこかに寄生して生きざるを得ない、だから町はずれにゲットーをつくって住むとか、あるいは町中にしても壁をしっかりと高く立ててその中に住むとか、そういう**シナゴーグ**なんていうものを造るうえでも少し異質なものとして常に考えられたわけです。

商売をしなくてはいけないから、「こっちからこっちへ持っていって、そこにいい物を売る」という、そういうお互いの役割、結局、商業の役割をしていたわけです。

しかし、この人たちもやはり最初は太陽神であるということは言いましたけれども、やはりとにかく東へ行こうとする、そういう勢いというか希望があったわけです。

これはもう「世界中の人たちが太陽神というものを信じていた」ということはすでにお話ししましたけれども、やはり太陽が昇る所に行こうという精神、これが商売よりももっと強いわけです。これが、おそらくかなり早い時期からユダヤ人が日本にやって来ていた理由です。

エジプト人は来ないのです。エジプト人とかシリア人とかは来ないのはなぜかというと、彼らはきちんとそこの国があるから何も遠くに行く必要はないのです。地元でしっかりと生きられれば、それに越したことはないのです。ですから、エジプト人たちはここにきちんと文化を創り上げるわけです。

ご存知と思いますけれど、あのピラミッドなんていうのは素晴らしい文化であるわけです。

ピラミッドというのも結局、太陽神、太陽信仰から出ているということがあるのです。それは何かというと、太陽に近い所、山をつくろうというそういう信仰であるわけです。だから、太陽神というのは必ず山の上にあるのです。**マチュ・ピチュ**もそうですね、高い山の上で信仰するのです。

皆さん**富士山**に登ると必ずご来光を拝むわけです。あれは富士山だけ登っても、「そこで山があるから」なんて言って登ると同じことです。ただ高い所に登ったというだけです。ところが、やはり日本人はみんなご来光を見に行こうとするのです。必ずそういう富士山を登る動機があるわけです。

それこそが大事なことで、あそこで高い所に登って、より高い所から、より太陽に近い所から太陽を見るという、こういう信仰がおそらくピラミッドを造ったと思うのです。

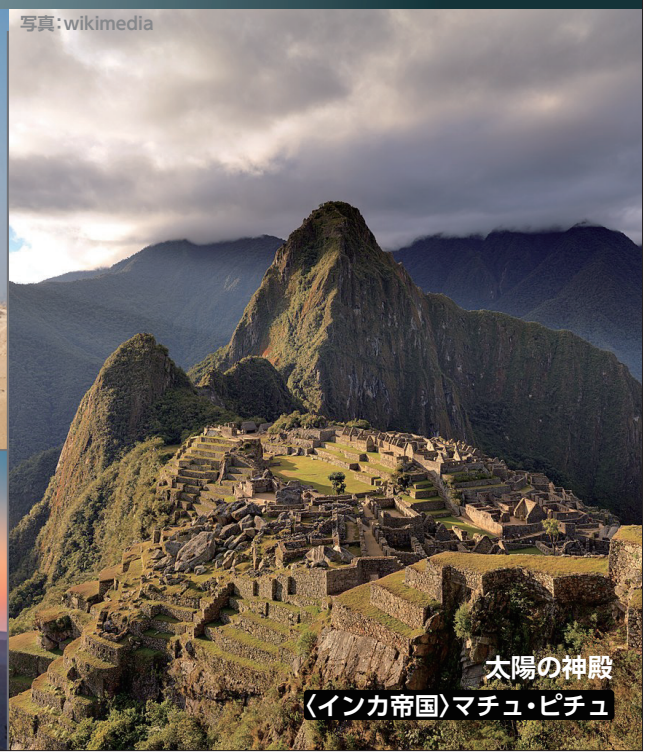
ピラミッドというのは110～120メートルありますが、お墓ではあんな高い山をつくる必要はないわけです。お墓はもう低くて十分なわけで、ですからやはりそういう高い山をつくろうとしたのです。あそこは砂漠地帯ですから高い所はないわけですから、周囲に山はないです。

ですから、ナイル川の周辺にたくさんのこういうピラミッドができるというのは、やはり山をつくって太陽に近づこうとする、そういうことであるはずなのです。

エジプトは太陽自身を山で造って、ピラミッドを造って近づこうとします。しかし、それができないユダヤ人たちは、今度は「太陽が昇る所に行こう」という精神的動機、物質的動機が出てくるわけです。

太陽信仰

太陽神ラー
〈エジプト〉ピラミッド



太陽の神殿
〈インカ帝国〉マチュ・ピチュ

天照大御神
〈日本〉富士山と御来光

この前も少し言いましたけれども、日本に来た人たちが4万年前ですけれど、中国に来た人たちが3万年前くらいです。

ですから、まさに「日本に行こう、日のもとに行こう」と、太陽が昇る所、日出ずる国に行こうとする、そういう精神が働いていて、**縄文時代に圧倒的に東国に人口が多かった**というのもそれだったのです。

〈ユダヤ人を受け入れた日本〉

いずれにしても、そういう事実がはっきりしてくると、やはりこういう精神的動機がまず最初にあって、そして日本に着いたところ、今度は素晴らしい水と自然がありました。

今日でも70％は森林だと言われているわけで

縄文遺跡分布密度と縄文各期の地域別人口

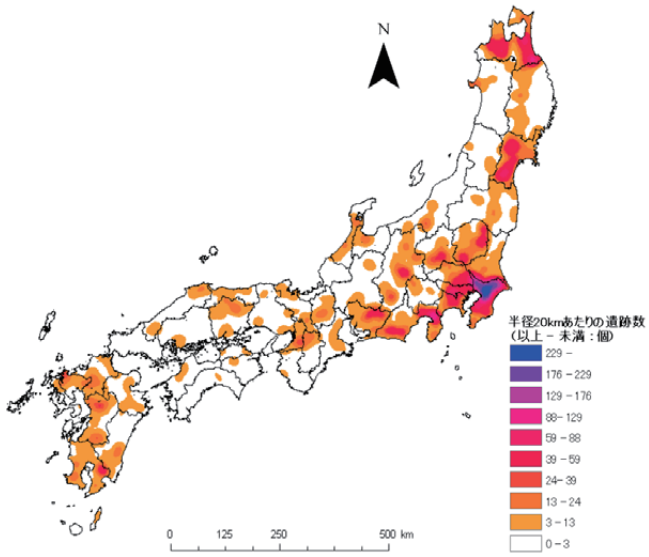


図7　縄文遺跡分布のカーネル密度による面的表現

※『縄文遺跡の立地性向』枝村俊郎（元神戸大学工学部教授）、熊谷樹一郎（摂南大学理工学部教授）より

地方	縄文 早期	縄文 前期	縄文 中期	縄文 後期	縄文 晩期	弥生	土師（はじ 奈良・平安）
東北	2,000	19,200	46,700	43,800	39,500	33,400	288,600
関東	9,700	42,800	95,400	51,600	7,700	99,000	943,300
北陸	400	4,200	24,600	15,700	5,100	20,700	491,800
中部	3,000	25,300	71,900	22,000	6,000	84,200	289,700
東海	2,200	5,000	13,200	7,600	6,600	55,300	298,700
東日本	17,300	96,500	251,800	140,700	64,900	292,600	2,312,100
近畿	300	1,700	2,800	4,400	2,100	108,300	1,217,300
中国	400	1,300	1,200	2,400	2,000	58,800	839,400
四国	200	400	200	2,700	500	30,100	320,600
九州	1,900	5,600	5,300	10,100	6,300	105,100	710,400
西日本	2,800	9,000	9,500	19,600	10,900	302,300	3,087,700
全国	20,100	105,500	261,300	160,300	75,800	594,900	5,399,800

※縄文各期の地域別人口（『本当はすごい!東京の歴史』（ビジネス社刊、田中英道著）29頁を元に作成。

水煙土器など

写真提供：山梨県立考古博物館

山梨県安道寺遺跡出土
（縄文中期）

写真提供：井戸尻考古館

山梨県八ヶ岳周辺出土
（縄文中期）

写真提供：渋川市教育委員会

群馬県渋川市道訓前遺跡出土
「火焔型土器の影響を受けた焼町土器」
（縄文中期）

すが、とにかく水があり森林があり、そして川があり海があり、動物もいるし、こういう所に来るということは必然だったのです。

本当に砂漠で明日の食糧もおぼつかないというときには、もう動く以外ないわけです。しかしここではみんな定着するのです。ですから、縄文時代はすぐに定着して、そこから動きません。そこで十分食糧も得られるし、水も得られるし、敵もいません。

大陸では必ず敵がいて、食糧を奪う人たちがいます。あるいはものを取っていく人たちがいるという、そういう中で日本に来ると、もう奪う必要がないのです。持っているものがない、持っている必要がないのです。これはもう不思議です。

日本の家屋というのは、置く所がないのです。あれはその習慣がずっと続いているわけで、ダイヤモンドも何も持つ必要がないのです。何かというと、それはどこかにあればいいわけです。ですから、自分で持って逃げる必要はないわけです。

この文化というのが日本に定着すると、日本というのは本当に「慌てなくていい、ここにいれば大丈夫だ」ということの文化になるわけです。これがこの前の、**土器の素晴らしいひもで水をつくる**という造形文化を生んだわけです。

残念ながら、そこに文字文化は定着しなかったのですけれど、あの時にも言いましたが、文字なんかは必要としない信頼の文化、交渉だけでいい文化、言葉の文化、言葉というのは何かというと「言の葉っぱ」なのです。

言葉で定着する必要がない、つまり契約書を書く必要がない文化、これこそが日本の「口約束で十分だ」というところで、それでよかったのです。あとは、測るのはひもであればいいわけですから、ひもというものが非常に重要だということが分かるわけです。

これはもうご存知だと思うのですけれども、いずれにしてもそういう縄文文化の平和な時代を受けて、戦争で殺された大量の死者の骨は全然出てこないのです。

せいぜい2～3人が狩猟の時に間違えて撃たれたような、そういう人が出てくるだけであって、ほとんど平和だったということが分かるのです。こんな平和ですから、争う必要がないのです。「そういうことが人間の生活なんだ」ということを定着させた、これが日本の縄文人だったのです。

そこは日高見国（ひだかみこく）という、日を高く昇るのを見る国の人々でありました。これは『古事記』や『日本書紀』に、日高見国（ひだかみこく）

申命記　第28章「主の民へ」64節

主は地のこのはてから、ものはてまでのもろもろの民のうちにあなたがたを散らされるであろう。その所で、あなたもあなたの先祖たちも知らなかった木や石で造ったほかの神々にあなたは仕えるであろう。

という名前が出てきます。あるいは『風土記』にも出てきますから、それで十分に予想がつくわけです。

そういうことで日本という国が、ユダヤ人が非常に来たがっていたというか、このことも面白いことに、『旧約聖書』を読むとよく分かるのです。

いつも持ち歩いているのですけれども、『旧約聖書』のいろいろな言葉があって、『申命記』の28章64節に何て書いてあるかというと、**「主は地のはてからはてまでのすべての国々の民の中に、あなたを散らす」**ユダヤ人たちが散っていくわけです。

「あなたはその所で、あなたもあなたの先祖たちも知らなかった木や石で造ったほかの神々に仕えるであろう」とあります。これは「地のはて」というと、日本は確かにユーラシア大陸のはてなのです。そこまで来てその人たちの神々に仕えるということを、『申命記』は言っているのです。

この「地のはて」が日本だとすると、あるいは私は確実だと思うのですけれども、そこに「木や石の神々」これはもう完全に自然神のことなのでしょう。

神道というのは自然信仰、御霊信仰、皇祖霊信仰というこの3つがあると私は見ているのですけれども、そういう自然信仰というのがある国だということが、もう『申命記』に書いてあるのです。

ですからこの辺で、この「地のはて」というのは日本だということが分かりますから、やはりこの辺ですでにユダヤ人たちは、「地のはて」に何があるかというのを知っていたということなのです。

ユダヤ人との関係というので、これから少し面白い事実としてさまざまな点をご紹介します。

1つは、**DNAがよく似ている**ということです。DNAのさまざまな分類をしていくと、Aからたくさんあるのですけれど、その中のD1というところ、あるいはDEというところが非常にユダヤ人と日本人が似ているというのです。

これは朝鮮人や中国人にはないのです。ですから、そういうことになりますと、やはり日本人とユダヤ人が非常に関係があるのだということは、DNAで分かってくるわけです。これは「偶然だろう」などと否定できないのです。

これまでに日ユ同祖論という人はたくさんいるのです。その人たちは大体が宗教者で、「日本の神道というのはユダヤの宗教と同じだ」ということを言いたがるのです。

ですから日本人もそういう宗教に、「キリスト教なりユダヤ教徒になりなさい」というような感じで話すものですから、少し反発を食うわけです。

「そんなことになったら、これまでキリスト教な

日本人とユダヤ人は遠い親戚〈Y染色体ハプログループ〉

東アフリカで約6万5千年前に変異によりY染色体「ハプログループDE」の最初の一人が誕生した。この変異は「**YAP**」という特殊な遺伝子配列として記憶され、「**ハプログループDE**」にしか存在しない。
日本人は「ハプログループD」に属する「D1a2a」が最も多く、**ユダヤ人は「ハプログループE」**に属する「E1b1b1a1a」が多いことから、**親戚同士といえる関係**である。
ちなみに、**中国人（漢民族）、朝鮮人は「ハプログループO」**に属し、「ハプログループD」はほぼ存在しない。
※朝鮮人にわずか4%の「ハプログループD」が存在するが、これは元々いたわけではなく日本統治時代の影響であると言われている。

〈日本人〉D1a2a＝38.8%	O-47z＝25.1%	O1b2＝8.4%	O2＝16.7%
〈漢民族〉D1a2a＝0%	O-47z＝0%	O1b2＝0%	O2＝65.9%
〈朝鮮人〉D1a2a＝4%	O-47z＝4%	O1b2＝33.3%	O2＝40%

んてほとんどいないじゃないか」と、「そんなユダヤ教的な人たちはいないじゃないか」ということになって、神道なんていうのはユダヤ教ではないので、今更入ってきたとしてもそんなものは根付かないということになるわけです。

事実そうなのです。それはどういうことかというと、この『申命記』にあるように、ユダヤ人たちは日本の神に従ってしまったのです。このことが非常に重要なのです。大体、日ユ同祖論者も、あるいは今の現代の知識人も、日本には何もないと思っているのです。

日本の神道なんてアニミズムで全然レベルの低い信仰だと思っている人たちが多いのです。これはもう西洋のキリスト教が一番立派な宗教で、あとはだんだん、アニミズム、シャーマニズムなんていうのはアフリカの宗教だというふうに考えてしまうものですから、神道なんていうのはアニミズムだと思っている人が多いのです。

しかし、そうではないのです。やはりこういう自然信仰というのは、日本の風土の中でいまだに生きているのです。私の母親なんていうのは、本当に太陽信仰、あるいは月信仰を持っていました。

お月さまが満月のときにはやはりお庭に出て、戦後の一時期でしたがそこにおまんじゅうを置いて拝んでいました。

やはりそういうことがきちんとつながっているし、いまだにお祭りが続いていることが多いですし、それが神社によく表されているわけです。

ご存知だと思うのですけれども、その12支族が日本にまでやって来たというような、「日本のさまざまな支族がみんなユダヤ人を起源にする」というふうなことを日ユ同祖論は言うのですけれど、そうではないのです。

その前に、日本は長い間いろいろな人々が入ってきて、それが縄文精神というか、あるいは神道の自然信仰をつくったうえで、ユダヤ人がユダヤ人として入ってくるのは大体紀元前7世紀以降のことで、アッシリアにやられて、そこからディアスポラを始めた、そういう消えた12支族がその辺から動き始めたわけですから、それ以後なのです。

しかし、縄文というのはもっと長い1万6，500年前から始まっているわけで、はるかに長い、世界一長い文化の時代なのです。

世界で初めて縄文土器を作った、つまり石器時代からの土器、これは「何か似たようなものだ」と皆さんは思うかもしれませんけれども、そうではなくて、土器というのはただ土を固めて乾かしただけではないのです。

あそこは焼いているので、土器というのはしっかりと硬いのです。これはどういうことかというと、よく言われるのは「日本に火山があるから。山の近くに土器が多い」ということから、やはり、火山の高温の火で熱したのが**縄文土器**なのです。

ですから、縄文土器と石器の違いというのは、石器はただそれを磨製したり、打製で打ったりして1つのナイフを作るわけです。

そういう時期は、西洋では大体紀元前７０００年ぐらいまでは続くのです。中国も同じです。ところが、日本は1万6，５００年前からしっかりとした焼いた土器ができるわけです。特に焼いた土器に縄模様を付けるというのは、今みたいに簡単に装飾を付けるというだけの問題ではないのです。

元来は必要ないことです。ところが、それを煮炊きできる土器を作って、そして、そこに必ず精神性を込めたうえでの縄目を付けていくのです。

縄目というのは、後になると、例えば神社に木があると必ずそこに縄を結ぶわけです。それが神木だということを表すわけです。そういうことを常にやる文化がまさに縄文文化であるわけです。

そうすると、それはそれ以後の神社の基本になるわけです。ご存知のように、必ずひもがあったり、縄が結ばれていたり、神社は縄というものが常に重要な役割をするわけです。

ですから、それはもう完全に縄文から続いているのが神道だということが分かってくるわけです。そのことについては、またいずれ神社のところでお話しします。

そこのところで、大体7世紀ごろから来る人たち、これが基本的にユダヤ人だということになってきます。今までは「中国人だ。朝鮮人だ」と思っていましたけれども、面白いのは中国も実をいうとそういうところがあるのです。

アジア人は自然の状態で生きることが好きなのです。ですから、何も「国家をつくって何かから守る」という必要はあまり感じないのです。これは東南アジアもそういうところがあります。非常に穏やかな人たちがたくさんいるわけで、何も戦う必要がないのです。

常に水があり森がありますから、別にそう慌てる必要もありません。日本と同様に台湾もそうです。そういう穏やかな人たちができるわけです。

ですが、残念ながら大陸の人たち、農耕民族は、やはり騎馬民族が来ると必ずやられるのです。ちょうど**日本も同じようにモンゴルが来た時**に、やはりやられそうになったわけです。

【元寇】鎌倉時代中期、２度にわたりモンゴル帝国

笹山遺跡（新潟県）出土土器群　写真提供：十日町市博物館

（元）と高麗が日本に侵攻した。一度目は1274年（文永11年）の文永の役、二度目は1281年（弘安4年）の弘安の役。日本の武士は九州北部に土塁を築き、鎌倉幕府の下、一丸となって世界最大規模のモンゴル・高麗連合軍と戦い勝利した。

しかし、日本は団結して福岡で土塁を積んで、いわゆるモンゴル軍、朝鮮の連合軍を、そこで「神風が吹いた」と言いますけれども、やはり軍事力が強かったわけです。

つまり1274年、あるいは1281年の蒙古襲来、そういう時代まで日本に中国人が一度も攻めてきていないということは、それだけ日本が軍事力があったということもあるのです。

もちろん朝鮮半島で、ある意味でいつもコンフリクトというか、衝突がありましたけれども、日本に来たのは蒙古襲来が初めてです。

そう伝え聞いて、あるいは「日本が攻めにくい島である」ということも分かるわけです。大体、日本海もそうですけれども、朝鮮半島と北九州・対馬を除くとほとんど海を渡ることは大変なのです。

よほど船の操縦ができる民族とか、そういう経験を持った人たちしか日本にたどり着けなかったという、そういうこともあるわけです。ですから、日本にたどり着くというのは、相当能力のある人たち、体力のある人たちだということも少し考えた方がいいのです。「日本に来る人たちは非常に壮健であった」ということでもあるわけです。

ユダヤ人埴輪が日本にあった

〈日本に溶け込んだユダヤの人々〉

それで、今言ったように、ユダヤ人たちが長い間掛かって日本に来る過程がいくつか考えられるわけですけれども、シルクロード、あるいは草原の道とか、海の道を通ってくるという大体3つの大きなルートがあっただろうと思うのです。

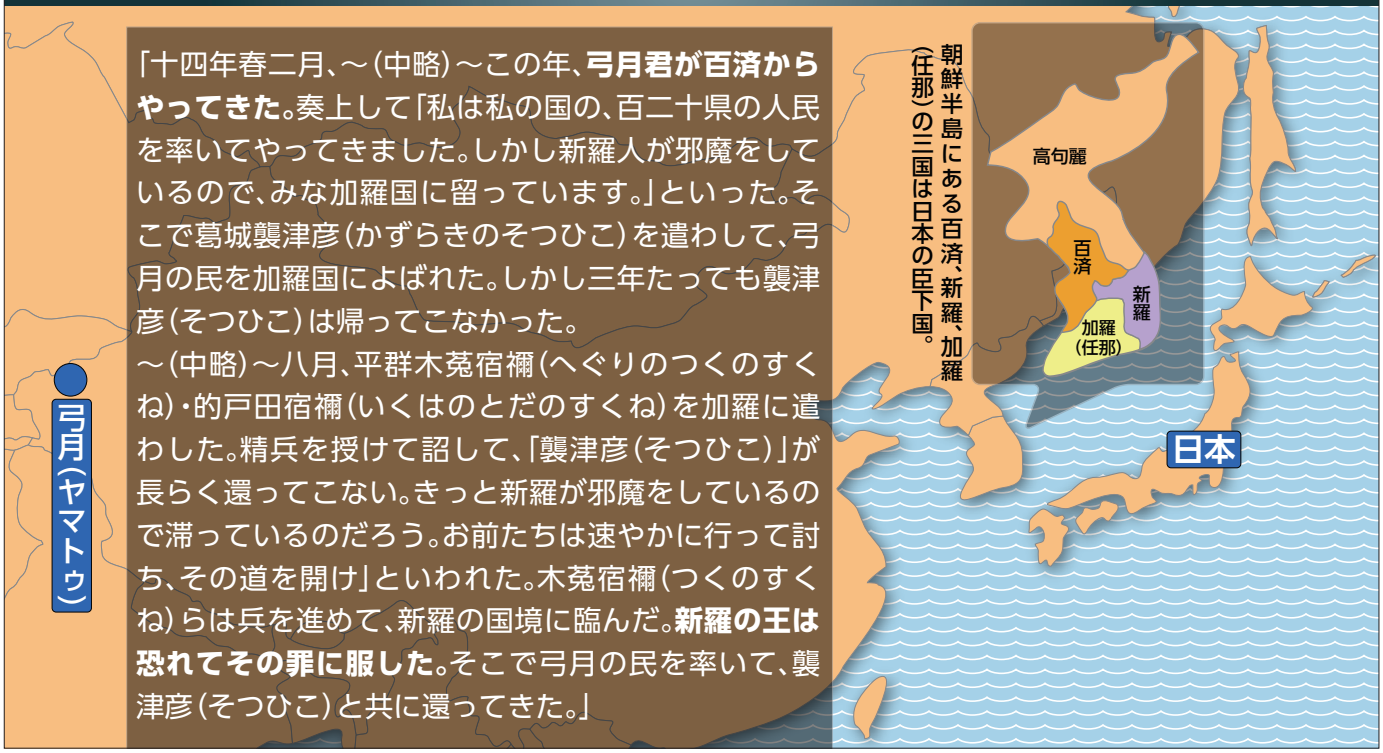
少し具体的に言いますと、ちょうどシルクロード沿いに、これは漢語ですけれども、ある時「弓月国」という国がありました。これは『古事記』にも「弓月国が日本にやって来る」と書かれているのです。

『日本書紀』によれば、AD414年ごろといわれているのですけれども、15代の応神天皇のころに、弓月国から「日本に来たい」という連絡がありました。ところが、新羅の国の妨害で帰化がかなわないということでした。応神天皇のころにそういう上奏文が日本に送られてきました。

派遣されたときの葛城氏が武内宿禰（たけうちのすくね）の子なのですけれども、葛城氏の祖になるわけですが、これが助けに行って、弓月国の民を加羅という国から引き受けてきたということ

日本書紀　巻第十　応神天皇　誉田天皇（ほむたのすめらみこと）

「十四年春二月、～（中略）～この年、**弓月君が百済からやってきた。**奏上して「私は私の国の、百二十県の人民を率いてやってきました。しかし新羅人が邪魔をしているので、みな加羅国に留っています。」といった。そこで葛城襲津彦（かずらきのそつひこ）を遣わして、弓月の民を加羅国によばれた。しかし三年たっても襲津彦（そつひこ）は帰ってこなかった。
～（中略）～八月、平群木菟宿禰（へぐりのつくのすくね）・的戸田宿禰（いくはのとだのすくね）を加羅に遣わした。精兵を授けて詔して、「襲津彦（そつひこ）」が長らく還ってこない。きっと新羅が邪魔をしているので滞っているのだろう。お前たちは速やかに行って討ち、その道を開け」といわれた。木菟宿禰（つくのすくね）らは兵を進めて、新羅の国境に臨んだ。**新羅の王は恐れてその罪に服した。**そこで弓月の民を率いて、襲津彦（そつひこ）と共に還ってきた。」



です。

その後、416年ごろ、応神天皇は新羅の妨害を除去して弓月国の民の来朝を実現させるために、精鋭をまた加羅に派遣して、新羅をけん制して、ついに弓月国の使が日本にやって来ました。それが「1万8,000人ぐらいだ」という記録が『日本書紀』にあるわけです。弓月の民は「波の多」と書いて、波多という名前の姓を賜るのです。

これが16代の仁徳天皇のときに、波多氏の姓を得て、そして土地も与えられるわけです。それで、特に21代の雄略天皇のころ、**太秦という、今京都にありますけれども、この土地を与えました。**ですから、この雄略天皇のころはすでに5世紀の後半ですけれども、それがこういう人たちを歓迎しているわけです。

それで、結局私はこれの証拠というのをつかんだわけです。証拠とはこれ（資料を指しています）なのです。ちょうど同じ時期に埴輪（はにわ）が作られていて、そして、この埴輪（はにわ）がちょうどユダヤ人の顔、姿をしているのです。

特に重要なのは、ここに独特な「角髪（みずら）」というものです。われわれはここ（もみあげの辺りを示しています）で剃ってしまうのですけれども、髪を束にして耳の前にこの独特な角髪（みずら）を付けるのがユダヤ人なのです。

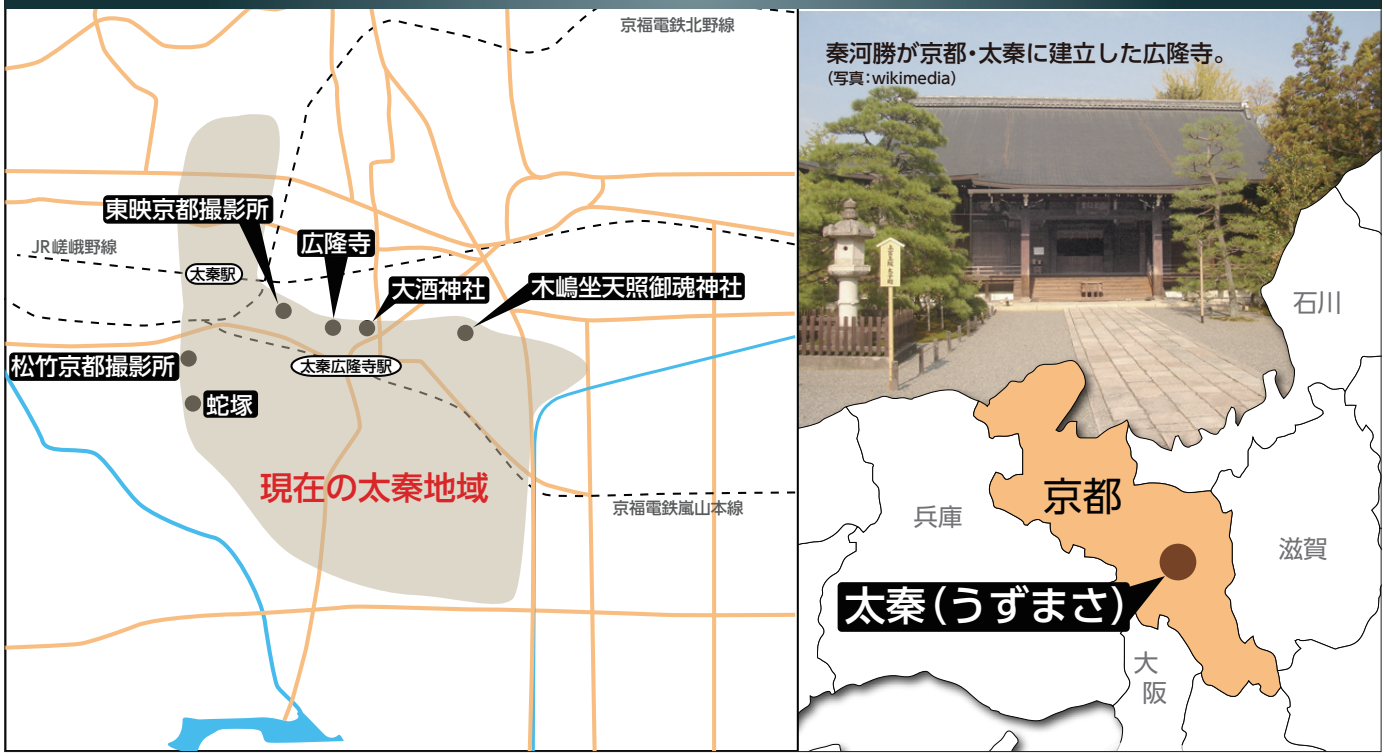
これは「現代だけではないか」ということです。実をいうと、おととし、イスラエルのテルアビブという所の大学に招待されました。日本学の学会があったのです。私も招待されて行って、何を発表してきたかというと、このことを話してきたのです。

つまり、「日本にユダヤ人がこんなに古くから来ているんだ」ということを発表してきました。非常に皆喜んでいると同時にショックを受けて、いろいろな質問が出てきたのですけれども、「その後こういう人たちはどうなっちゃったんだ」という質問があって面白かったのです。

この人たちは、その後すっかり消えたのです。こういう顔の人、こういう姿の人は日本の風俗には全然残っていないのです。「彼らがどこかに行ってしまったのか」というとそうではないのです。彼らは秦氏として日本に残ったのです。しかし、こういう風俗は残っていないのです。

大体、今みたいな風俗が現代だけだと思っている人が多いのですが、そうではなくて、『レビ記』という所にこういう風俗はきちんと書いてありまして、「ユダヤ人は角髪（みずら）を付けろ」と、そういうことをきちんと言っているわけです。「これがユダヤ人の印なんだ」ということです。ですから、

ユダヤ系の渡来人（秦氏）は日本で厚遇され、天智天皇／仁徳天皇から京都／太秦の地を賜った



埴輪とユダヤ人～日本出土の埴輪にユダヤ人の姿　写真提供:芝山はにわ博物館

千葉県芝山古墳で発掘された埴輪
(芝山はにわ博物館／芝山仁王尊 観音教寺所蔵)
※「芝山はにわ博物館」は現在休館中です。

埴輪とユダヤ人～日本出土の埴輪にユダヤ人の姿　写真提供:芝山はにわ博物館

千葉県芝山古墳で発掘された埴輪
(芝山はにわ博物館／芝山仁王尊 観音教寺所蔵)
※「芝山はにわ博物館」は現在休館中です。

この長いユダヤからシルクロードをずっと通ってきた人たちは全部これを付けているのです。

ユダヤ人埴輪が日本にあった

〈日本に溶け込んだユダヤの人々〉

特にこれが典型的なのは**芝山遺跡**という所なのです。しかし、後でご覧に入れますけれども、もうこういう姿は関東のほとんど、人物埴輪（はにわ）というのは大体こういう角髪（みずら）を付けているのです。

ここにもたくさんの角髪（みずら）を付けた様子がご覧に入れられますけれども、こういう人たちが、この前栃木に行ったのですが、栃木にもあったし群馬にもありました。

それから仙台の高城の東北の博物館にもあったし、それから、岩手の盛岡の博物館にもあるのです。

埴輪とユダヤ人～日本出土の埴輪にユダヤ人の姿

写真提供:芝山はにわ博物館

千葉県芝山古墳で発掘された埴輪
（芝山はにわ博物館／芝山仁王尊 観音教寺所蔵）
※「芝山はにわ博物館」は現在休館中です。

埴輪とユダヤ人～日本出土の埴輪にユダヤ人の姿

写真提供:芝山はにわ博物館

千葉県芝山古墳で発掘された埴輪
（芝山はにわ博物館／芝山仁王尊 観音教寺所蔵）
※「芝山はにわ博物館」は現在休館中です。

ですから、ずっとこういう人たちがいたということです。

そしてこれが、もちろんこういう帽子を徹底的にこういうふうにかぶっている者は割合少ないのですけれども、必ず剣を持っているとか、あるいは角髪（みずら）を付ける、こういう人たちが非常に多いということが分かるのです。

こういう武器を持って彼らはやって来ているのです。ですから、こういう武器を持っているにもかかわらず、日本に助けを求めているというのは、やはり新羅（しらぎ）などではそれ以上の武器を持っている人たちが抑えたわけです。

そしてそれを日本人が助けた、応神天皇が助けに行かせたというわけです。これは非常に彼らを

埴輪とユダヤ人～日本出土の埴輪にユダヤ人の姿　写真提供:芝山はにわ博物館

千葉県芝山古墳で発掘された埴輪
（芝山はにわ博物館／芝山仁王尊 観音教寺所蔵）
※「芝山はにわ博物館」は現在休館中です。

喜ばせたわけです。非常に最初の時期に私も言いましたけれど、ユダヤ人たちというのは非常に人懐っこいのです。ユダヤ人たちは人が好きなのです。

なぜかというと、やはり当然彼らは孤独で、典型的な例は1つのディアスポラですから、常に人々に「怪しいやつだ。外から来たやつだ」と言われて、まさにいつも追われるのです。「かわいそうだな」という感じがするのです。

ところが日本に来ると、天皇が皆さんに「どうぞ来てください」と言って、「来たい」という人たちを受け入れて土地を与えているのです。一番良い、京都の太秦まで与えているわけです。こういう人たちは日本で満足する以外にないのです。

そして日本では「ヤハウェの神を信じろ。それを広めろ」なんて全然考えてないです。ですからこの辺が**日ユ同祖論者**と違うのです。

【日ユ同祖論】日本人（縄文人）もユダヤ人も、共にヤコブの兄弟民族であるとする説。日ユ同祖論では、日本人の祖先が 2700 年前にアッシリア人に追放されたイスラエルの失われた十支族の一つであると考えられている。

「彼らはそういうものを十分に捨てていいのだ。実を言うと神なんていうのははっきり言ってしまえばうそなのだ。あれは砂漠でつくられた、ああいう荒野で必要としたのだ。しかし日本に来たら神なんて必要ないのだ。自然そのものが神ではないか」と、そういうふうになってしまうのです。ここが重要なことなのです。

今は、われわれは誰も宗教を信じているというわけではありません。「みんな無神論者」とは言わないのですけれど、みんな正月になったら必ず神社へ初詣に行くわけでしょう。

「私は信徒だ」なんて若い人は少しも言いませんけれど、必ずそういう人たちまで全部神社に行くわけです。これで十分に信徒なのです。

それは何かというと、季節がきました。自然の、昔だったら春ですよね。「春がきました。みんなで集いましょう。神様に拝みましょう」と、そういうことをやるわけです。それがこの日本の新嘗祭にもなるわけです。

結局**新嘗祭**というのは大嘗祭（だいじょうさい）と同じように秋にやるわけですけれども、しかし初詣というのはやはり、「新しい太陽、新しい時間、そういうものがきた時にみんなで祝おうじゃないか。みんなでお祈りしようじゃないか。**四方拝（しほうはい）**をしようじゃないか。つまり拝もうじゃないか」と、そういうふうに自然にこう人々が集まるわけです。

【新嘗祭】日本の収穫祭。11 月 23 日に天皇が五

穀を天神地祇（てんじんちぎ：天孫降臨以前からの神）に勧め、天皇も自ら食して収穫に感謝する。戦後は GHQ の占領政策によって同日は「勤労感謝の日」とされた。

【四方拝（しほうはい）】元日の早朝、宮中において天皇陛下が天地四方の神祇（天津神・国津神）を拝する儀式。

大体初詣に9,000万人も行っているというのです。ですから、それは自然の太陽神、自然の信仰なのです。実を言うと、太陽神もそうですけれど、太陽神とか自然神は一番世界で自然な宗教なのです。

つまり今は科学が発達してしまって、科学でみんな分かるということで、自然に対処しているのです。しかし、自然科学者は分かったようなことを言って実は少しも分かっていないのです。

これは私がそれを言うと、「人文学者のくせにそういうことが言えるのか」と言われるかもしれません。そんな程度のことは、今のいろいろな科学の本を読むと、やはりそんなに難しくないのです。

「アインシュタインの相対性原理が何か」なんていうようなことは、「数式で書け」なんて言うと、そこで少し問題になるかもしれませんけれど、言っていることは相対性原理です。

だから簡単なことです。電車に乗れば相対性原理があることがすぐ分かるのです。電車に乗っていると、やはりそこでまた新しい空間ができて、それが外の空間と違うわけです。相対性原理というのはそういうことなのです。

大体自然科学というのは、宇宙がどうなっているかなんていうようなことはいまだに分かっていないのです。「ビックバン」なんて言っても、何の原動力でそうなっているのかなんて分からないです。膨張していることは確かです。しかしそういういろいろな現象が分かるだけです。

東大というのは文化系の人も数学と理科を学ばないと入れないのです。おかげで私は一生懸命数学や理科を勉強して東大に入りました。その程度でもやはり分かるのです。

大体理科系の達成度というのは、確かに宇宙に行くのにいまだに宇宙に地球と同じ星があるのかというのは誰も知らない、誰も見付けられないわけです。なぜ地球ができたか、などというのも分からないのです。そして火星に行ってもまるで全然地球の風景と違う、水さえないのです。

「水が昔あったんじゃないか」なんて言うだけのことであって、その程度なのです。そして細胞1つさえ作れないのです。こういうふうにけなすと科学者は怒るかもしれません。しかしその程度のことは分かります。

ですから、科学が自然を分かっているなんていうのはとんでもないうそなのです。つまり、結局この時代とそんなに変わっていないということなのです。こう言うと身もふたもないのですけれども、太陽信仰でいいのです。そして太陽信仰はいまだに太陽が重要であるわけです。

太陽のことをすべてを分かっているわけではないし、「何であんなに燃えているのだろう」という感じです。「銀河系なんていうのはどうやってできたのだろう」というようなことも説明できないですよね。

自然科学というのは大体ユダヤ人が学者をしています。**アインシュタイン**もそうですし、ボーアとか、原子力を作ったのはみんなそうで、爆弾などを作ったのは**オッペンハイマー**というユダヤ人です。**マルクス**もユダヤ人です。

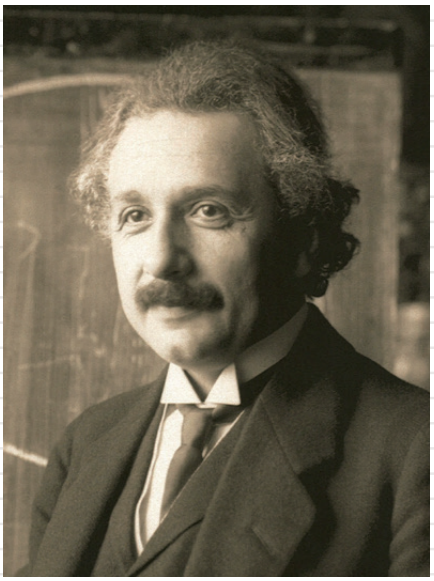
ですから日本人はユダヤ人から学ぶことが多いのです。しかし、彼らが分かっているかというとそうではないのです。それで、相変わらずこの終末論を言うわけです。つまり「この世は終わる」と言うのです。

ですから、キリスト教が大体そういう終末論です。ユダヤ人が大体そういう考えなのです。ところが「終末」なんて言って何が起こるのかということです。ですから必ず「最後はものすごいハルマゲドンが起きて、大地がめちゃくちゃになる」というようなことを言うだけです。

それからキリスト教では「地獄に行くのだ」とか言いますが、これもみんなうそです。誰も行ったことがないし、誰も証明できません。しかし、そんなことをたくさんの人が言うと、それをみんなが信じたのが西洋の人たちなのです。

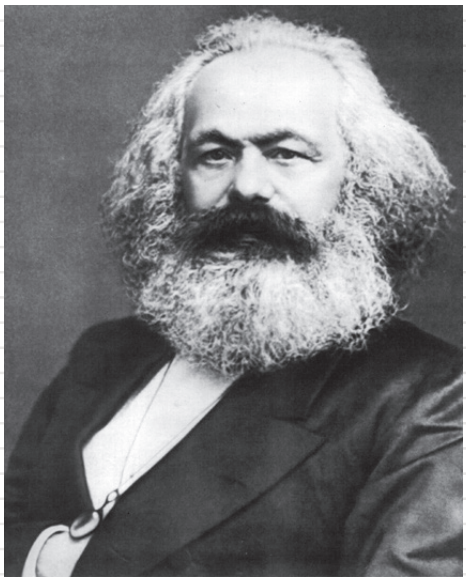
われわれ日本人はそういうのを何も信じていな

ユダヤ人の著名人



アルベルト・アインシュタイン
（1879-1955／理論物理学者）

ロバート・オッペンハイマー
（1904-1967／理論物理学者）



カール・マルクス
（1818-1883／思想家）

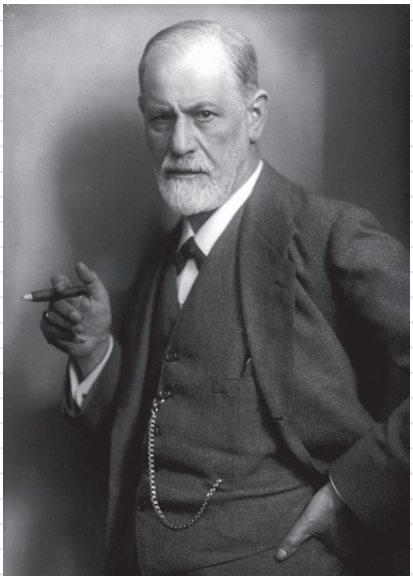
いです。私は「自然神、自然道、自然史だけが頼りだ」と言っているのです。しかし自然史というのはどうなるか分からないです。

ですから、「未来だ何だ、未来志向だ何だ」なんて言っても、日本人はあまり未来のことを考える必要はないし、考えても無駄なのです。

無駄というと語弊があるかもしれませんが、ユダヤ人は計画を考えるわけです。何しろ世界は終末が起きますから、その前に何とかしようというのです。

ところが、そういう思考パターンを日本人は全然取らないのです。日本は四季があって「来年の春もまた木の芽が出て秋には実るだろう」と、そういう考え方だけです。それで良いのです。

ユダヤ人の著名人



ジークムント・フロイト
（1856-1939／精神分析学者）

クロード・レヴィ＝ストロース
（1908-2009／文化人類学者）

ウォルター・ロスチャイルド
（1868-1937／貴族）

それ以外はみんな予想だけであってうそなのです。そういうので日本というのは、「四季は必ず来るだろう」ということです。それだけではなく、「地震があったり、今度みたいに疫病もあるだろう。ということは、苦しむこともあるだろう」ということです。

たまにはあるけれども、今は水がなくなるということは日本ではないでしょう。とにかく大暴風雨が来たり、台風が来たり、地震が来たり、大津波が来たりするということは考えられるわけです。

しかし日本は、それを全然恨みに思わないわけです。そういう自然というものに非常に信頼を置いているわけです。こういう考え方にユダヤ人たちは同化してしまうのです。

ですから、これから何度か、面白い、神話の中にユダヤ人が書かれているということを、少し次の回でもお話しします。こういう、国をつくる時に、やはりこういう人たちが結構、ユダヤ人みたいに言葉を作って、言葉で法律を作るのです。

ハンムラビ法典なんていうのは昔の法典ですけれど、ユダヤ人たちは法律を作るのが大好きなのです。破ることも好きなのですけれど、法律を作ることが好きなのです。

実を言うと、これも面白いのです。**秦の始皇帝**というのがいるのですが、これがどうもユダヤ人なのです。これはもちろん史記に書いてあることなのです。あの宰相の奥さんがユダヤ人だということは大体分かるのです。秦の始皇帝の、**秦というのは中国の西の方**です。

そして向こうから来る人たちにとって今でも入りやすい所で、今でもウイグル族の問題になっています。あそこは西方から来る民族がたくさん入って来る所なのです。そしてその中にユダヤ人がいるのです。それで私は証拠を見付けたのです。

次回お見せしますけれども、ある図面に、顔にきちんと角髪（みずら）を付けた人たちがたくさん書かれているのです。それが西の方の絵に出てくるのです。ですから彼らが来ていたというのはよく分かるのです。

そういう人たちが来ていた時に、あの辺りというのは常に分裂しているわけです。それを統一したのが秦の始皇帝ということです。これについては後にお話しますけれども、秦の始皇帝がユダヤ人だということは、この史記の話をもう少し詳しくしないといけないのですけれども、大体彼の統一ぶりというのは完全に独裁です。

秦の始皇帝

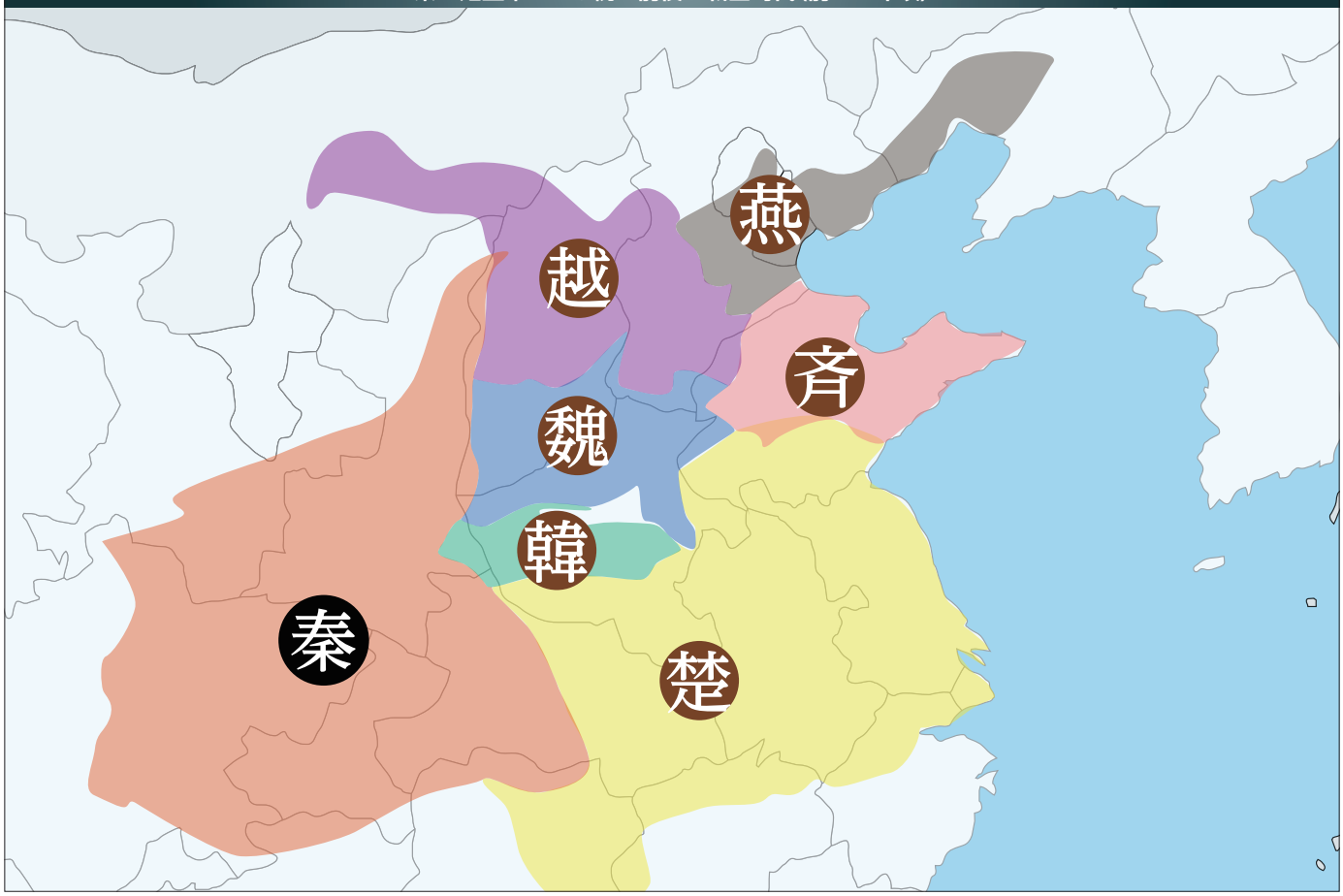
これは西洋的な騎馬民族nomad（ノマド）という、騎馬民族しかできないような強硬な手段でやるわけです。これは全国で**焚書坑儒（ふんしょこうじゅ）**といって、それまでの本を全部焼いたり、今の共産党がやるようなことをやっているわけです。

【焚書坑儒】紀元前 213 ～ 212 年、始皇帝は郡県制（中央集権）に反対し古い封建制に戻ることを主張する儒学者たちを弾圧した。書経・詩経・諸子百家などの書物を焼き払い（焚書）、始皇帝を非難した儒学者数百人を生き埋め（坑儒）にした。そして同時に、これは騎馬民族ですから非常に強力な軍隊で、それの長がやはり秦の始皇帝になるわけです。

そのちょうど下の、宰相になっている人が、つまり今のアメリカのキッシンジャーやブレジンスキーとか、ああいう辺りのような顧問となっているのはユダヤ人です。今や、アメリカやヨーロッパの顧問は全部ユダヤ人です。そんな人がいないのは日本だけです。全部ユダヤ人です。大体それはもう事実としてあるわけです。

そしてご存知だと思いますけれど、この**ジャック・アタリはこんな立派な本を書いています。『ユダヤ**

秦の始皇帝による統一前夜の戦国時代（前260年頃）



人、世界と貨幣　一神教と経済の４０００年史』、これは世界の歴史をユダヤ人を中心として書いているのです。

このジャック・アタリという人は、実を言うと、今のマクロンの最高顧問です。マクロンを引き出したのもこの人なのです。非常に左翼ですからマルクスの信奉者なのですけれども、これが今のヨーロッパの顧問です。

『ユダヤ人、世界と貨幣　一神教と経済の4000年史』（ジャック・アタリ）

ジャック・アタリ（写真）は１９４３年、旧フランス領アルジェリアの首都アルジェ生まれのユダヤ系フランス人。ミッテラン大統領（任期１９８１-１９９５）以後、マクロン現政権に至るまで仏政権の中枢で政策決定に重要な役割を担う経済学者、思想家。欧州復興開発銀行の初代総裁（１９９１-１９９３）も務めた。

ユヴァル・ノア・ハラリ

ユヴァル・ノア・ハラリは、イスラエルの歴史学者。ヘブライ大学歴史学部教授。
著書『サピエンス全史～文明の構造と人類の幸福』、『ホモ・デウス テクノロジーとサピエンスの未来』は世界的ベストセラーとなった。

しかし、こういう人たちが今、ロスチャイルド家以降、大体のヨーロッパの基本的な部分や政治家は、もうユダヤ人なしには考えられないです。けれど、これはユダヤ人も言わないし、ヨーロッパ人も言わないのです。

ですから日本に伝わってこないのです。それをあからさまに言ってしまうと混乱してしまうのです。「全部ユダヤ人じゃないか」となると、そういうことはヨーロッパ人は誰も言いたくないのです。「イギリス人がやったんだ」「フランス人がやったんだ」「ドイツ人がやった」と、こう言いたいわけです。

前人ですけれど、確かにそういう人たちもいるわけです。ですから「前人たちがやった」と言いたいわけですけれども、残念ながら、ずるいところ、戦争とかお金とか、全部おかしいところは全部ユダヤ人がやっているのです。

近代というのは、それがないとヨーロッパ人は成り立たないのです。この人たちはお金を持つ、利子を取るということは平気です。ですから「銀行はユダヤ人がつくった」と言ってもいいわけです。産業革命もユダヤ人がつくったのです。

ですから、基本的にそういうお金の問題が出てきたときに、**ユヴァル・ノア・ハラリという人、この人は『サピエンス全史　文明の構造と人類の幸福』**を書いた人ですけれど、「お金をつくったのはユダヤ人だ」とはっきり言っているのです。

それから、「近代をつくったのもユダヤ人だ」と、少なくともそういうことをここでも言っているわけです。大体、世界というものをつくったのもユダヤ人だと言いますが世界という概念が誰も……。

日本人は日本史みたいに日本のことについてしか書けないわけです。それは世界も大体そうなのです。フランス史というのはフランス語をしゃべる人たちの国のことだということです。ですから、フランス人はフランス史しか書けない、ドイツ人はドイツ史しか書けないのです。世界の史などというのは、書けるのは誰もいないのです。今ならばいますけれど、当時は世界を旅行している人なんていないのです。

私も世界で周れる所は周ってきました。しかし、世界史を書けるということは、細かくどの国の事情も知らないと書けないですよね。だけれど、ああいうこのグローバリズムの時代はみんな世界史を書いていました。

マクニールが世界史を書きましたが、大体アメリカのユダヤ人が書いているのです。ユダヤ人ではないにしても、その影響で書くのです。なぜかというと、ユダヤ人はどこにでも行きますからいろいろな

ことを知ることができる、あるいはからくりを知ることができるからです。

世界史を書けるのはユダヤ人だけなのです。ですから、西洋史学会の会長は大体ユダヤ人です。フランス、イタリア、ドイツに留学しましたけれども、私の指導教授はみんなユダヤ人です。それは前にも言いました。ですから、そのことが大事なことなのです。世界史を書けるのはユダヤ人だけなのです。

ところが実は、私に言わせれば、ユダヤ人は日本を分かっていないのです。なぜかというと、秦氏のことをユダヤ人があまり言わないです。ただ、秦氏とは言わずにユダヤ人だとは言うのです。ですから、日ユ同祖論というのは、「ヘブライ語と日本語が似ている」ということをたくさん書くわけです。

それから、「アークはお祭りのみこしで、日本に来ている」というようなことを言ったり、それから「祇園祭というのはシオンの祭りだ。ああいう大きな箱車というのは何かというと、あれは要するにノアの洪水の時に作った箱舟だ」と言うのです。

だから船の格好をしているのです。それで「あれは箱舟だ」と言うのです。そして、箱舟が着いた時というのは7月17日だったのです。ですから、祇園祭というのは大体7月15日ぐらいにやるのです。

場合によっては6月15日で、これは暦の関係で1ヶ月ぐらい前になることもありますけれど、「そういうことは全部、ユダヤのお祭りがきちんと日本で行われているのだ。みこしもいわゆる三種の神器を運ぶ箱だ。そしてそこにはきちんと金の装飾がしてあって、だから日本のみこしも全部金色だ」と言っているのです。

ですから、これほどたくさんの事例があると、こういう風俗的なものを日本に持ち込んだことは否定できないです。後でお話ししますけれども、この資料にもたくさん挙げましたけれど、確かに神社のほとんどがユダヤ人によって造られているのです。

それから、もちろんそれだけではなくて**お寺も造っている**のです。これはご存知だと思うのですけれども、聖徳太子が「自分の仏像を置く所がないか」と言うと、それで秦氏が「それはじゃあ造りましょう」と言って造ったのが太秦の広隆寺です。広いという字で広隆寺です。

ですから、そういうお寺とか神社を作るのに非常に貢献しているのだけれど、ではそれでユダヤの神を祭るのかというと、何も祭っていないのです。秦河勝の、秦家の始祖を像にしていて、それを日本では神像と呼んでいますけれど、せいぜい

秦氏が創建に関わった神社

写真:wikimedia

▲広隆寺（京都市右京区太秦蜂岡町）

◀木嶋坐天照御魂神社（京都市右京区太秦森が東町）

大避神社（兵庫県赤穂市坂越）▶

秦氏が創建に関わった神社

写真:wikimedia

伏見稲荷大社（京都市伏見区深草）

松尾大社（京都市西京区嵐山）

そのくらいなのです。ですから日本に来て、彼らは自分の一神教を捨ててしまったのです。

このことも、先ほどの申命記に書かれていること通りにやっているわけです。ですから、このことも今のユダヤの知識人たちは忘れているのです。自分たちの宗教を忘れたということはしゃくにさわるのでしょうけれども、しかし日本の方が心地よいのです。

それでいてきちんと日本には秩序があるし、きちんと人々が整然と従う、あるいはそれをきちんと守る、誠実に約束を守るという、そういうものが依然として続いているのです。これをキリスト教なしに、ユダヤ教なしに、イスラム教なしにやっているということです。

このことは、皆さんが知らない神道と神仏習合というものがこれだけ重要な役割をしているのだということが分かるわけです。

そして、こういう問題というのはさらに細かく言わないと分からないわけですが、日本の建国というところにも彼らの貢献が非常に大きいということも分かりますし、先ほども言いましたように、日本の神話の中にもあるわけです。

彼らから言わせれば「伊邪那岐（いざなぎ）と伊邪那美（いざなみ）がイザヤのイザだ」ということだったり、これから私はいろいろな検討をしていきますけれど、しかし彼らはそういう日本に従ってしまったのです。

そういうことを申命記にもきちんと書いてありますから、それに従うのだということです。ですから、それをどういうふうに解釈していくかということです。

そして、こういう**角髪（みずら）**を付けるような服装がなぜ消えてしまったのでしょうか。実を言うと、これは天武天皇が「この角髪（みずら）をやめましょう」と言ったのです。聖徳太子の息子たちまでは角髪（みずら）を付けているのです。

ですから「古代の何か」というと、すぐに角髪（みずら）を付けるわけです。ですから、左翼の研究者が「角髪（みずら）を付けている。あれは権力者の印だ」なんて言いますが、権力者ではなくユダヤ人の印なのです。

そういう左翼の学者たち、つまり「権威が悪いのだ」という歴史家たちは天皇批判ばかりしているわけです。そういう人たちは日本のことが分からないのです。

今は、共産主義なんていうのはまさにろくな主義ではなかったということは、ソ連でも分かるし中国でも北朝鮮でも分かるわけです。ですから、

秦の始皇帝と秦河勝

◀聖徳太子(574-622)

▲秦河勝(古墳〜飛鳥時代)

▼始皇帝(前259-210)

そんなものが何の理想にもならないということが分かってくると、「もっと伝統的なものの中に良いものを見いだそうではないか」という動きが出てくるわけです。

トランプというのは日本ではあまり評判が良くないですけれど、とんでもないです。あの人こそ本当のことを言っているのです。実を言うと、あの**周りは全部ユダヤ人**なのです。クシュナーという息子がそうですし、それから財務長官、商務長官、全部ユダヤ人です。

あれが新しいユダヤ人なのです。そういう人たちが「もうグローバルユダヤはやめようじゃないか」と言っているのです。ですから、「グローバルな一帯一路なんて、あんな世界中に共産主義をばらまくなんてことはやめようじゃないか」と言っているわけです。

ドナルド・トランプ米大統領とユダヤ

ドナルド・トランプ米大統領は中国共産党の全体主義と戦っている。正しいことをやっている。そして、彼の周囲にはユダヤ系の人物が多い。
大統領上級顧問である娘婿のジャレッド・クシュナーは米国系ユダヤ人。大統領補佐官を務める娘のイヴァンカ・トランプは、クシュナーとの結婚とともにユダヤ教に改宗。財務長官のスティーブン・ムニューシンも米国系ユダヤ人である。
トランプは言う、「グローバルはやめようじゃないか。一帯一路なんて、世界中に共産主義を輸出するようなことはやめよう」と。最初はユダヤのグローバリストは中国を支持していた。しかし一部の共産主義者だけが特権を得る社会はだめだと気がつき、トランプと一緒にやっている。

ドナルド・トランプ米大統領

スティーブン・ムニューシン
米財務長官

ジャレッド・クシュナー
大統領上級顧問

イヴァンカ・トランプ
大統領補佐官

「あんなものはいち抜けた」と言うものですから、中国がはしごを外されてしまったのです。ですから中国は今、大慌てです。なぜなら世界中に中国共産党の国をつくろうと思っていたわけです。

それを最初は、ユダヤのグローバリストは支持していたのです。実を言うとこういう人たち、ジャック・アタリなども支持していたのです。ところが、中国にはそういうことをやる能力がないということが分かったのです。

あんな貧乏な人たちがたくさんいて、共産党だけが豊かだというような、あんなことをやったら経済も良くならないです。人々も活気が出ないです。そして中産階級もできないです。

ですから、「あれはもう失敗だ。早めにやめよう」ということで、今、全部撤退しているわけです。それをトランプはユダヤ人と一緒に一生懸命にやっているわけです。

そういうことで、こういう問題が出てくると、とても日本も面白くなってくるのです。日本というのはそれを克服してきたのです。「日本こそがユダヤ人の理想国だ」ということになってくると、もっとそういうことを言った方がいいのです。

「日本はただ人のいい島国で、きっと自然がいいからみんな穏やかなんだろう」と、その程度ですけれども、それだけではないのです。それだけの歴史があって文化があるのです。ですから、そういう人たちがかなり景況しているわけです。

秦河勝というのは、能の始祖でもあります。能舞台のああいう翁（おきな）なんていうのは、どうもユダヤ人の顔をしています。そんなことも面白くなってくるわけです。しかし日本はそれを日本人の中に同化してしまったというところに、非常に面白いところがあると思います。

大体この時間になりましたのでこの辺でやめておきます。

また来月、どうも失礼しました。（了）

DIRECT

ダイレクト出版株式会社

〒541-0052 大阪府大阪市中央区安土町2丁目3-13 大阪国際ビルディング13F
TEL 06-6268-0850　FAX 06-6268-0851